

白氏文集 三十一 長恨歌（一）

加藤 淳平

白樂天が詩作中最も世に知られ、我が邦平安時代に、紫式部等數多の女房の袖を濡らせるは長恨歌ならずや。玄宗の長安に没せるは、樂天の生まれたる十年前なり。楊貴妃との哀話、唐の宮廷のみならず、廣く世に知られたれば、それを題材とす。白樂天三十五歳の宮中勤務の折のつれづれの作ならむ。

長恨歌（一）

長恨歌（一）

漢皇重色思傾國

漢皇色を重んじ 傾國を思ふ

御宇多年求不得

御宇多年 求むれども得ず

楊家有女初長成

楊家に女有り初めて長成し

養在深閨人未識

養はれて深閨に在り 人未だ識らず

天生麗質難自棄

天生の麗質 自ら棄て難し

一朝選在君王側

一朝選ばれて 君王の側に在り

迴眸一笑百媚生

眸を廻らして一笑すれば 百媚生ず

六宮粉黛無顏色

六宮の粉黛 顏色無し

春寒賜浴華清池

春寒くして浴を賜ふ 華清の池

溫泉水滑洗凝脂

溫泉水滑らかにして 凝脂を洗ふ

侍兒扶起嬌無力

侍兒扶け起こせば 嬌として力無し

始是新承恩澤時

始めて是れ 新たに恩澤を承くる時

雲鬢花顏金步搖

雲鬢花顏 金步搖

芙蓉帳暖度春宵

芙蓉の帳暖かくして 春宵を度る

春宵苦短日高起

春宵短きに苦しみ 日高くして起く

從此君王不早朝

此れより君王 早朝せず

（大意）漢の皇帝が（唐の玄宗皇帝を名指しすることを憚って漢の皇帝とした）後宮に入れる女性を重視し、絶世の美人が居ないかと長い治世の間探して居たが得られなかった。所が（蜀地方、則ち今の四川省の）楊といふ家に娘があつて、やつと成年になつたばかりであり、世間の人はまだ知らなかつたが、生まれつきの麗しさは自ら輝いて放置しては居られない。到頭（一皇子の妃の一人から宦官によつて）選ばれて玄宗皇帝の身近に侍ることになる。この人が眼を向けて一笑するといかにもなまめかしい。六つの宮殿に住んで白粉や眉墨で飾り立てた後宮の女性たちは誰も色あせて見える。春のある寒い日、長安の都の東郊にある離宮の華清宮の溫泉で入浴を許された。溫泉の水は滑らかで脂を凝らしたような白い肌を洗ひ、湯から出たところを侍女たちが扶け起こすと、ぐったりしてあだっぽい。これが始めて皇帝の寵愛を受けた日のことだった。花のかんばせと雲のやうにたわわな鬢の黒髪に、歩きたびに揺れる優雅な金のかんざしがよく似合ふ。芙蓉の花の模様の付いた帳の中の暖かい寢臺で、春の夜を過ぐす。春の夜は短かく、語らひはいつまでも盡きず、皇帝が起きるは日が高くなってからである。それまで政務に精勤して來た玄宗が、楊貴妃を得てから毎日早朝から始まる百官の謁見に出席しないことになつた。

（平成三十年七月五日受附）